

## マタイ26章31-75節 「ペテロのつまずき」

### 1A イエスの予告 31-35

### 2A ゲツセマネの祈り 36-46

### 3A 捕えられるイエス 47-56

### 4A イエスの裁判 57-68

### 5A ペテロのイエス否定 69-75

## 本文

マタイによる福音書 26 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びはマタイ 26 章の後半部分、31 節から始めます。前半部分には、イエス様が二日たつと過越の祭りになり、その時に十字架に付けられるという予告をされたところから始まりました。そして、女が香油をイエス様に注いだ出来事があり、またイスカリオテのユダが祭司長たちのところに行き、イエスを売る約束をして、それから過越の食事の場面へと移りました。その時に、イエス様はご自身を裏切る者がここから出て来ると言われました。そして食事を済ませてから、今、オリーブ山に向かっている場面に入っています。

### 1A イエスの予告 31-35

31 そのとき、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたはみな、今夜わたしにつまずきます。『わたしは羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散らされる』と書いてあるからです。32 しかしわたしは、よみがえった後、あなたがたより先にガリラヤへ行きます。」

イエス様が、弟子たちがご自身か散らされてしまうことを、ゼカリヤ書 13 章にある預言を引き合いに出してお語りになっています。主は、神がご自分の預言のことばをもって、全てを用意周到にご計画されていることを知っておられました。それに従って、動いておられます。

ところで、イエス様は今、彼らに対して過越の食事を一緒にされたことを思い出してください。イエス様は既に彼らに対して、ご自身の裂かれた肉体であるパンを食べ、また新しい契約のために流される血としてぶどう酒を飲まれました。彼らはこれからつまずくのですが、それでもイエス様が彼らをご自身に引き寄せて、守ってくださっている様子を伺えます。復活するということ、それから、ガリラヤに先に行っているということまでお話になっています。ガリラヤでの出来事は、ヨハネ 21 章に記されています。彼らはつまずいても、確かにイエス様が守ってくださるということです。「わたしが彼らを保ったので、彼らのうちだれも滅びた者はなく、ただ滅びの子が滅びました。それは、聖書が成就するためでした。(ヨハネ 17:12)」私たちがキリストの弟子として生きる時に、イエス様について行くことのできるの、自分の肉の力ではなく、イエス様ご自身の真実と選びの力によるこ

とが分かります。

33 すると、ペテロがイエスに答えた。「たとえ皆があなたにつまずいても、私は決してつまずきません。」34 イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに言います。あなたは今夜、鶏が鳴く前に三度わたしを知らないと言います。」35 ペテロは言った。「たとえ、あなたと一緒に死ななければならないとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません。」弟子たちはみな同じように言った。

ペテロとその他の弟子たちが、教会の指導者となり、新約聖書の著者ともなっています。そして、彼らは、「律法の行いではなく、神の恵みによって救われること。また神の恵みによって、御霊によって生きること。」を教えて行きます。その恵みの真理は、彼ら自身の失敗に裏付けられたものです。ペテロの「決してつまずかない」という発言自体に、彼がつまずいてしまう一歩が見えています。主語は何になっているでしょうか、「私は、決してつまずかない」となっています、日本語訳には出てきませんが。新約聖書における真理は、つまずきから守ってくださるのは主であって、自分の肉の力ではありません(ユダ 24)。

しかも、ペテロは、「たとえ皆があなたにつまずいても」と言っています。確かに彼の意欲においては、他の弟子たちよりも頑張りがあったのかもしれませんが。けれども、その肉の力に頼ることによって、他の人たちよりも先に言っているという自負を造ってしまいました。後にイエス様は、復活された後に、ペテロに対して「あなたは、この人たちが愛する以上に、わたしを愛していますか。(ヨハネ 21:15)」と尋ねることになります。他の弟子たちと比較することに対して戒めを与えられているのです。

イエス様は、ペテロが「今夜、鶏が鳴く前に三度わたしを知らないと言います。」と予告されました。ここの「知らない」というのは、情報として知らないという意味ではありません。自分とは関係がない、つながりがないという否認発言、いや背信発言と言ったらよいでしょう。イエス様が、このようなことを人前ですれば、自分も否認されることをイエス様は警告しておられました。「10:33 しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、わたしも、天におられるわたしの父の前で、その人を知らないと言います。」

## **2A ゲツセマネの祈り 36-46**

36 それから、イエスは弟子たちと一緒にゲツセマネという場所に来て、彼らに「わたしがあそこに行き祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。37 そして、ペテロとゼベダイの子二人と一緒に連れて行かれたが、イエスは悲しみもだえ始められた。38 そのとき、イエスは彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにいて、わたしと一緒に目を覚ましていなさい。」

ゲツセマネというのは、午前礼拝でもお話ししたように、「オリーブの压榨場」という意味合いがあります。オリーブ山と呼ばれていて、今はオリーブの木はほとんど生えておらず、唯一、イエス様の時代にもあったかもしれない長寿のオリーブの木が生えている部分が教会の管轄の中で守られています。オリーブ山の麓のどこかで、イエス様と弟子たちはいつも集まっている私的な場所がありました(ヨハネ 18:1-2)。祭司長たちがイエスを捕えるのに、イスカリオテのユダが名乗り出ましたが、民に知られないようにして捕えたかったので夜が適切です。それならばなおのこと、イエス様の顔を判別できず、誰か内通者が必要でしたが、ユダがそこに来たということです。

そこに来たら、イエス様が祈られると言われました。お独りで祈られます。非常に興味深いことに、イエス様が福音書の中で、弟子たちや信者たちと共に父なる神と一緒に祈られたことは一度もありませんでした。必ずお独りで祈られました。そして弟子たちが聞くことができるように祈られる時は、その祈りが弟子たちに敢えて聞くことができるために、そのように祈られます(例:ヨハネ 11:42)。それはそのはずで、イエス様は神の独り子であられ、御子として御父に祈られる中に、他の人である弟子たちが加わることはできないからです。

しかし、イエス様は弟子たち八人には、座っていなさいと言われて、ペテロ、ヨハネ、ヤコブは近くにまで連れて行かれます。そしてともに祈ってくれるように願います。これまで、ヤイロの娘を生き返らせた時、また高い山に上り、そこで変貌された時も三人を連れて行かれました。そこでイエス様は突然、悲しみ悶えられ、しかも死ぬほどに悲しいと三人に語られます。イエス様がこのように押し潰されるような感情を弟子たちに漏らすのは、初めてではないでしょうか？主は、それまでかなりの自制を利かせて感情は表に出しておられませんでした。今、祈りを捧げようとする時に、その内にあるものがどっと出てきてしまっています。

そして彼らには、「わたしと一緒に目を覚ましていなさい。」と言われて、独りでは祈られますが、その後ろで一緒に祈っていてほしいと願われています。イエス様は神の御子であり、神であられながら、なおのこと他の人が一緒にいることを願っておられました。私たちの神は一体の神、交わりの神であることを思います。父、子、そして聖霊が一体となっている神です。その中に交わりがあり、一つにされているのですが、神のかたちに造られた私たちも一つになることを願われています。神は独りで存在することは可能ですが、そのご性質上、他者とのつながりを持つことを願っておられたのです。弟子たちは、はっきりいって頼りにならない存在であるにも関わらず、それでも独りでいることを拒まれたのです。私たちは、なおさらのこと互いの祈りを必要としますね。

39 それからイエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈られた。「わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしが望むようにはなく、あなたが望まれるままに、なさってください。」

これが、福音書の中で、神の救いのご計画の中で最も大事な分岐点であり、霊の戦いの勝敗の地点であったことを午前礼拝で話しました。イエス様が、罪から来るあらゆる苦しみのかみを飲みほし、さらに神の罪の対する御怒りの杯を飲み干されます。それが、もし人が何らかの行いによって救われるのであれば、過ぎ去らせてほしいと祈られています、勝敗はここで決まったのです。「わたしが望むようにはなく、あなたが望まれるままに、なさってください。」自分ではなく、神の御心に従わせることです。これをアダムが反対の事を行って、世界が悪魔の支配下に入りましたが、イエス様はその逆の事を行われて、世界をご自分の支配の中に入れ、神のものに返されます。

40 それから、イエスは弟子たちのところに戻って来て、彼らが眠っているのを見、ペテロに言われた。「あなたがたはこのように、一時間でも、わたしとともに目を覚ましていられなかったのですか。41 誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい。霊は燃えていても肉は弱いのです。」

もう夜が更けています。そして、イエス様と過越の食事を取られ、オリーブ山へ歩かれる時も、イエス様から最後の最後まで、弟子たちへの愛の言葉をかけられていました。心がおそらく疲れていたことでしょう、これから最も大きな試練が来るのですが、そのことについて気づいていませんでした。その疲れから眠ってしまいました。そしてこの眠りは、肉体的だけでなく、霊的にもそうです。差し迫る危険に対してペテロもヨハネもヤコブ、他の弟子たちも何の用意もできていませんでした。しかし、イエス様は彼らを責めておられません、むしろ彼らの事を気にしておられます。「誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい。」であります。祈りによって、誘惑に陥るところから守られます。御霊によって祈ることによって、私たちは霊的な自分の姿や周囲の姿が見えてきます。そして祈るということは、自分の肉に頼らず、神にただよりすがる行為そのものであります。

しかし、イエス様は知っておられました。「霊は燃えていても肉は弱いのです。」ということです。これは今、物理的に、肉体的に弱くなっているだけの話ではなく、先ほどのペテロの発言に関することです。つまり、霊としては、どんなことがあっても、たとえ死ぬようなことになってもイエス様について行きたいのです。しかし、肉は弱いのです。パウロが、ロマ書 7 章でその葛藤と苦悩を話していました。「7:18-19 私は、自分のうちに、すなわち、自分の肉のうちに善が住んでいないことを知っています。私には良いことをしたいという願いがいつもあるのに、実行できないからです。私は、したいと願う善を行わないで、したくない悪を行っています。」

42 イエスは再び二度目に離れて行って、「わが父よ。わたしが飲まなければこの杯が過ぎ去らないのであれば、あなたのみこころがなりますように」と祈られた。43 イエスが再び戻ってご覧になると、弟子たちは眠っていた。まぶたが重くなっていたのである。

午前礼拝でお話したように、イエス様はご自分が飲む他に方法があれば、過ぎ去らせてくださいと願われたということです。他の方法で人が神の怒りから免れることはできないのか？というこ

とですが、できないというのが御心でした。そして、弟子たちは睡魔に襲われていて、二度目にイエス様がいらした時にも眠ってしまっていました。

44 イエスは、彼らを残して再び離れて行き、もう一度同じことばで三度目の祈りをされた。45 それから、イエスは弟子たちのところに来て言われた。「まだ眠って休んでいるのですか。見なさい。時が来ました。人の子は罪人たちの手に渡されます。46 立ちなさい。さあ、行こう。見なさい。わたしを裏切る者が近くに来ています。」

神の御心の確かさを示すのに、三回と言う回数が聖書には出てきます。例えばサムエルが預言者として召される時に、三回、主が幼いサムエルに現れてくださいました。ペテロが、異邦人への宣教を教えられた時に、ヤツフォで三回、天からの幻を見ました。そして祈りにおいて、イエス様は父なる神から三度、同じようにその願われていることを悟り、イエス様はご自身を父の御心に完全に合わせて、服することを決めることができたのです。祈りの力というのは、自分が神の心を動かす力ではなく、自分の心が神の心に一つになることと言えましょう。神に任せきった魂ほど、力強いものではありません。そこからイエス様は果敢に十字架への道を進まれます。

そして、弟子たちに語りかけられた言葉、「まだ眠って休んでいるのですか。」は、別訳では「もう眠って休みなさい」となっています。イエス様は、この時点でおそらく弟子たちのために祈られたのかもしれませんが。「見なさい。」と続いています。そう言われるまでに、実は時間が経っている可能性があります。ペテロのことをイエス様が祈られて、サタンにふるいがかけられるけれども、信仰がなくならないように父に願ったと、イエス様は言われていましたが、そうやって祈っておられたのではないか？と思われます。

それで、「時が来ました。」と言われます。イエス様は、いつも「わたしの時」と言われて意識しておられましたが、その時がついに来ました。それから、「罪人たちの手に渡されます。」と言われます。これから祭司長たちによってイエス様が捕縛され、ユダヤ人たちの裁判にかけられます。これらの手続きにおいて、ことごとく彼ら自身の掟に違反しているところを見ます。イエス様を罪人として罰するのですが、実はその断罪している彼らこそがそうやって裁いて自らを断罪しているのに気づいていませんでした。そしてイエス様は、「立ちなさい。さあ、行こう。」と言われました。イスカリオテのユダが近づいているからです。その時に自ら行かれて、自ら捕まえられるようにされます。それは、これらのことがすべて彼らの企みではなく、神のご計画の中で進んでいくためです。彼らが主導ではなく、イエス様が主導なのです。

### **3A 捕えられるイエス 47-56**

47 イエスがまだ話しておられるうちに、見よ、十二人の一人のユダがやって来た。祭司長たちや民の長老たちから差し向けられ、剣や棒を手にした大勢の群衆も一緒であった。48 イエスを裏切

ろうとしていた者は彼らと合図を決め、「私が口づけをするのが、その人だ。その人を捕まえるのだ」と言っておいた。49 それで彼はすぐにイエスに近づき、「先生、こんばんは」と言って口づけした。50 イエスは彼に「友よ、あなたがしようとしていることをしなさい」と言われた。そのとき人々は近寄り、イエスに手をかけて捕らえた。

イスカリオテのユダは、イエス様と弟子たちがしばしば会合するゲツセマネの園をよく知っていました。それで彼がこの群衆を先導していました。そのしるしは、「口づけ」です。それは、ラビに対して弟子たちが尊敬を示す行為です。そして、ユダは口づけをする時に、ギリシア語では深い口づけ、とても親愛のこもった口づけをしていることが分かります。ですから、イエス様は「友よ」と言われています。イエス様は、ユダの裏切りでさえ今や御心として受け入れ、そしてユダに対する愛情をお見せになっておられます。「あなたがしようとしていることをしなさい」という言葉には、ちょうど愛している者が悪意をもって危害を与えようとしている相手に、「やりなさい」と言っているのと似ています。

この時点で、彼らは二つの彼らの口伝律法に違反しています。一つは、賄賂です。ユダが賄賂を受け取っています。もう一つは、刑事事件については日没後に扱ってはいけないというものでありました。

51 すると、イエスと一緒にいた者たちの一人が、見よ、手を伸ばして剣を抜き、大祭司のしもべに切りかかり、その耳を切り落とした。52 そのとき、イエスは彼に言われた。「剣をもとに収めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。53 それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今すぐわたしの配下に置いていただくことが、できないと思うのですか。54 しかし、それでは、こうならなければならないと書いてある聖書が、どのようにして成就するのでしょうか。」

ここの「イエスと一緒にいた者たちの一人」というのは、ヨハネ 18 章でペテロであることが分かっています。イエス様はルカ 22 章 38 節で、これまでご自身がおられたので彼らを助けることができましたが、もうともにおられないので、生活に必要なものは持っていない、財布も剣もということと言われています。それで弟子が「剣が二本あります。」と言ったので、イエス様が「それで十分」と答えられています。それは生活で身の危険があった時に使うものですが、それをここでペテロが、イエス様を捕らえに来た集団に使ってしまいました。大祭司のしもべに対して、です。

イエス様は、「剣をもとに収めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。」と言われます。この聖書箇所はしばしば、国や個人の自衛を否定するために使う人たちがいます。けれども、そうではありません。ロマ 13 章において、社会の秩序のために神が權威を国に対して与えていて、剣も与えていることを使徒パウロは教えています。そうではなく、イエス様のために自分たちが守りに出ていること自体が無意味だということです。イエス様のところに隠れて、イエス様に守られるのではな

く、イエス様のために血肉の力で戦おうとしているのですから。

ペテロが、どんどん失敗して行っているのが見えるでしょうか？初めに、イエス様に羊が散っていくと警告された時に、決してそんなことはないイエス様の言葉と聖書の言葉に反論しました。私たちも知性や感情において、そんなことはないという反発を感じることはないですか、聖書に対して？そして次に、目を覚まして祈っていませんでした。眠っていました。それで霊的に心が神に任せていることができいていませんでした。そして今、イエス様に拠りすがるのではなく、イエス様を守ろうとしているという愚かな行動に出ています。

そしてイエス様がここで無力ではないことを、「十二軍団よりも多くの御使い」と言い表しておられます。軍団はあのレギオンというギリシア語です。ローマ軍に使われていた単位ですが、一レギオンは六千人の編成です。七千二百万の御使いの軍勢ということですが、一人の御使いがイエス様の復活の時に大地震を起こすことできる、力強い存在です。ですから、ここにいる者たちを一瞬で滅ぼすことが可能な方です。アッシリアに取り囲まれたエルサレムのことを思い出してください、17万5千人が一夜にして滅ぼされました。イエス様はすることがおできになるのです。

しかし、イエス様はもう心の中で決めておられました。それが、「こうならなければならないと書いてある聖書」があるということです。成就しなければならない神の御心があるということです。そのことに従順になるということです。詩篇 40 篇には、キリストについての預言があります。「40:7-8 そのとき私は申し上げました。「今、私はここにきております。巻物の書に私のことが書いてあります。わが神よ、私はあなたのみこころを行うことを喜びとします。あなたのみおしえは私の心のうちにあります。」」そして、そのみこころとは、御子の体そのものが、いけにえとなることをヘブル 10 章 10 節に書いてあります。このようにして、イエス様は御父の御心を選ばれて、それで今、私たちがいます。罪が赦され、神の子供とさせていただいています。

55 また、そのとき群衆に言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってわたしを捕らえに来たのですか。わたしは毎日、宮で座って教えていたのに、あなたがたはわたしを捕らえませんでした。56 しかし、このすべてのことが起こったのは、預言者たちの書が成就するためです。」そのとき、弟子たちはみなイエスを見捨てて逃げてしまった。

イエス様は群衆に対しても語られています。祭司長たちや長老たちは、イエス様が宮において教えておられた時に、いつでも捕らえることは可能でした。けれども、それをせず、まるで無防備のイエス様を、剣や棒をもって捕えに来ていたのです。実に滑稽ですが、なぜそうなっているかは、預言者たちの書があるからなのだよ。それが成就するためなのだ、と言われていています。この現場にいたペテロは、後にユダヤ人たちに対してこう説教しました。「神が定めた計画と神の予知によって引き渡されたこのイエスを、あなたがたは律法を持たない人々の手によって十字架につけて殺

したのです。(使徒 2:23) 神のご計画と予知によって、引き渡されます。

そしてこの時点で、ほんの少し前には死ぬまで付いてくると言った弟子たちがみな見捨てて、逃げてしまいました。

#### **4A イエスの裁判 57-68**

57 人々はイエスを捕らえると、大祭司カヤパのところに連れて行った。そこには律法学者たち、長老たちが集まっていた。

これは、ユダヤ人の統治機関であるサンヘドリンです。サンヘドリンには、大祭司の他に 24 人の祭司長がいました。みなサドカイ派です。そして 24 人の長老たちがいます、パリサイ派です。それから、律法学者たちが 22 人いて彼らもパリサイ派です。時にローマに任命されていたカヤパが大祭司でした、紀元 25-36 年までやっていました。彼の邸宅で宗教裁判を行っています。まず、これ自体が彼らの口伝律法で違反なのです。朝のいけにえが、始まる前に裁判を行ってはならないとされていたそうです。また、サンヘドリンは神殿の中の「裁判の殿堂」というところで行わなければならないのに、カヤパ邸で行なっているのです。

イエス様に対して反対すれば、あまりにも明らかな証しに対して反対すると、このように自分たち自身がますます矛盾に満ち、自分たちが過ちを犯し、滅茶苦茶なことをしているのです。しかし、そのことにも気づいていません。

58 ペテロは、遠くからイエスの後について、大祭司の家の中庭まで行った。そして中に入り、成り行きを見ようと下役たちと一緒に座った。

ペテロは、つまずきまで一歩手前に来ています。これまで、イエス様の言葉に反論し、祈るべき時に祈らず、そして、剣でもって相手に傷つけて、そして今はなんと敵と一緒に座っているのです。確かにペテロは他の逃げた弟子たちよりは、頑張っています。けれども、ペテロはイエス様に「遠くから」ついていっていました。近くではなく、遠くからついて行っているのです。そのために、結局、敵と一緒に座っているのです。私たちもそうではないでしょうか、自分はイエス様についていっていると言いながら、間を空けて遠くからついて行ったら、結局イエス様の敵の味方のほうにいてしまうのです。

59 さて、祭司長たちと最高法院全体は、イエスを死刑にするためにイエスに不利な偽証を得ようとした。60 多くの偽証人が出て来たが、証拠は得られなかった。しかし、最後に二人の者が進み出て、61 こう言った。「この人は、『わたしは神の神殿を壊して、それを三日で建て直すことができる』と言いました。」

そして、証言が必要なのですが、彼らは偽証を求めています。完全なでっち上げの裁判です。そして辛うじて、最後に二人の者が出てきましたが、それは神殿を壊すという発言をしたというものです。ヨハネ 2 章に、イエス様がそのようなことを語った記録がありますが、それはご自身のからだのことを話しておられたとあります。けれども、その証言も完全に合致していませんでした。ですから、神殿破壊という罪では裁けないと思ったのです。

62 そこで大祭司が立ち上がり、イエスに言った。「何も答えないのか。この人たちがおまえに不利な証言をしているのは、どういうことか。」

大祭司はイエス様が黙っておられるので驚いています。これもまた、預言の成就です。「イザ 53:7 彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが、口を開かない。屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」

63 しかし、イエスは黙っておられた。そこで大祭司はイエスに言った。「私は生ける神によっておまえに命じる。おまえは神の子キリストなのか、答えよ。」64 イエスは彼に言われた。「あなたが言ったとおりです。しかし、わたしはあなたがたに言います。あなたがたは今から後に、人の子が力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来るのを見ることになります。」

大祭司は神の御名によって命じました。しかしこれもまた、違法な裁判です。いわゆる黙秘権が、ユダヤ人の裁判の間でも守られていました。自分の不利な証言をしなくてよいことになっています。そして、裁判官に徹しなければならなかったのに、訴える訴状、つまり冒瀆罪を自分で訴えて、そして無理やり自白させて、そして判決を下すという、全然、裁判になっていません

けれども、大祭司は核心的なことを尋ねています。「おまえは神の子キリストなのか」ということです。今のユダヤ教では、キリストは人間でなければならないと教えています。神の御子ではないと教えます。モーセのような預言者、偉大な預言者であっても、人間です。けれども聖書の預言には数多く、キリストが神の御子であることが書かれています。そして当時のユダヤ教では、確かにキリストは神の御子であることを認めていたのです。そして、彼の自白によって、冒瀆罪に定めようとした。

そしてイエス様は、証言を、神の名によって命じられたので、強要されています。答えなければいけません。それで、そのまま詩篇 110 篇 1 節とダニエル書 7 章 13 節にあるキリスト預言をもって答えられます。まず、キリストは神の右の座に着かれること。そして、天の雲に乗って再び戻って来られます。しかも、「あなたがたは今から後に」と言われています。つまり、大祭司カヤパが今、裁きの席についていますが、イエス様こそが裁判の席に着かれて、彼らを裁かれることも含めてお語りになっています。

65 すると、大祭司は自分の衣を引き裂いて言った。「この男は神を冒瀆した。なぜこれ以上、証人が必要か。なんと、あなたがたは今、神を冒瀆することばを聞いたのだ。66 どう思うか。」すると彼らは「彼は死に値する」と答えた。

衣を裂くのは、驚きや嘆きを示す時に行うものですが、大祭司が装束を裂くのは律法で禁じられています(レビ 21:10)。そして彼らの間で、有罪判決は夜間に下してはならないとされていて、ことごとく自分たちの掟を破っています。

しかし、これも神のご計画のうちです。イエス様が、神の御子キリストであるということで、それで死刑に定められたのです。神の御子だから、キリストだから、死罪に定められたというのは、まさに神の御心であります。神を殺す、キリストを殺すという人類最悪の罪を犯したと同時に、神ご自身がそれを定めておられたという究極の救いのご計画の中に入っていました。

67 それから彼らはイエスの顔に唾をかけ、拳で殴った。また、ある者たちはイエスを平手で打って、68 「当ててみろ、キリスト。おまえを打ったのはだれだ」と言った。

ここから、イエス様が卑しめられ、打ちたたかれ、傷を受けて行く道を歩まれます。ユダヤ人の掟では、死刑判決を受けた者を刑の執行前に殴ること、打つこと、唾をかけること全てが罰金ものでしたが、彼らはおかまいなしです。

唾をかけるのは、徹底的な侮蔑を表しています。そして、イエス様は顔に覆いがかけられて、それで殴られています。「おまえを打ったのはだれだ」と聞かれているので。その殴られたり、打たれたりするのは、条件反射的に防御することによって、その威力を和らげるように体は出来ています。ところが顔が隠されていれば、その打撃をもろに受けなければいけません。それもみな、イザヤが預言したとおりです。「53:3 彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で、病を知っていた。人が顔を背けるほど蔑まれ、私たちも彼を尊ばなかった。」「52:14 多くの者があなたを見て驚き恐れたように、その顔だちは損なわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違っていた。」顔が殴られ腫れてしまい、これは人の顔なのか？と思われるほど変形し、それゆえ人々が顔を背けるほどだということです。

#### **5A ペテロのイエス否定 69-75**

ペテロは、このようにされているのを見なければいけませんでした。彼には、到底、イエス様がこんな目に会うなど、思いもよらなかったでしょう。彼がこれからイエス様を否みますが、それは恐れもあったでしょうが、落胆と混乱もその理由ではなかったのか、と思います。

69 ペテロは外の中庭に座っていた。すると召使いの女が一人近づいて来て言った。「あなたもガ

リヤ人イエスと一緒にいましたね。」70 ペテロは皆の前で否定し、「何を言っているのか、私には分からない」と言った。71 そして入り口まで出て行くと、別の召使いの女が彼を見て、そこにいる人たちに言った。「この人はナザレ人イエスと一緒にいました。」72 ペテロは誓って、「そんな人は知らない」と再び否定した。73 しばらくすると、立っていた人たちがペテロに近寄って来て言った。「確かに、あなたもあの人たちの仲間だ。ことばのなまりで分かる。」74 するとペテロは、嘘ならのろわれてもよいと誓い始め、「そんな人は知らない」と言った。すると、すぐに鶏が鳴いた。

ペテロは、大勢の剣をもった群衆の前では剣で立ち向かう無謀さがありましたが、実際は、召使の女に声をかけられただけで、知らないと言ってしまいました。これが彼の肉の力でした。ここまで来ないとペテロは、本当の意味で神に用いられることはできませんでした。福音の使者になることはできませんでした。自分の肉には善が全くなく、それゆえ今、その肉体が痛めつけられているキリストが代わりに罰を受けてくださったという恵みを受け入れなければいけなかったのです。

ペテロは、初めに見つけられた時は、混乱して「分からない」と言ったことでしょう。それで、すぐに出て行こうとして入口まで行ったらそこでも、聞かれました。その時は断定して、「そんな人は知らない」と言いました。ついに三回目、今度はガリラヤ人であることがその訛でばれました。誓って、嘘なら呪われてもいいとして、「そんな人は知らない」と自分に言い聞かせています。

75 ペテロは、「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います」と言われたイエスのことばを思い出した。そして、外に出て行って激しく泣いた。

ペテロが、思い出しました。これは、とんでもないつまずきです。初めに言いましたように、そんな人は知らないといったら、天において父の前で、人の子が知らないと言うというつまずきです。もう御国の中に入れぬ罪です。しかし、ペテロにとって自分の運命がそうなってしまったと思う以上に、自分の大好きなイエス様を知らないなどと言った、そのことがあまりにも嘆かわしく、イエス様に申し訳ない思いで、自分を責めたでしょう。悔いに悔いたでしょう。イエス様が、復活後に、「わたしを愛しますか？」と尋ねられます。三回尋ねられます。イエス様を知らないと言って、三度もいつて確かにしてしまったペテロの罪を、三度、「愛しますか？」と尋ねられて、赦しの確かさを明らかにしてくさったのだと思われます。

このペテロが、自分がつまずきの時にも、それでも信仰を捨てなかったのは、もっぱら神が守ってくださったからということを知りました。救いについて、ペテロは第一の手紙の中でこう言いました。「I ペテ 1:5 あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりの時に現されるように用意されている救いをいただくのです。」みなさんも、神に愛されています、神に守られています。自分が神を掴んでいると思っている間に、実は神が自分を掴んでおられることを知ってください。信仰により、神の御力によって守られています。